東京都古書籍商業協同組合創立90周年記念 日本の古本屋シンポジウム

「滅亡か、復権か一大規模デジタル化時代と本の可能性」

日 程 2010年4月14日(水) 14:00～18:00

場 所 国立情報学研究所 一橋記念講堂(東京)

主 催 東京都古書籍商業協同組合

協 賛 全国古書籍商組合連合会, アカデミック・リソース・ガイド株式会社

協 力 NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ

情報管理 53(3), 165-168, doi: 10.1241/johokanri.53.165 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.53.165>)

東京都古書籍商業協同組合は創立90周年を記念し、2010年4月14日、国立情報学研究所において書籍とデジタル化に関するシンポジウム「滅亡か、復権か一大規模デジタル化時代と本の可能性」を行った。定員の200人を大幅に上回る参加申し込みがあり、抽選で参加者を絞ったほどの盛況であった。

また、当日の会場の映像はインターネット上で生放送(ストリーム配信)され¹⁾、閲覧者からツイッターを通じて寄せられた質問²⁾にパネリストが回答するなど、リアルタイムWebを活用したシンポジウムであった。

以下に、その内容を簡単に報告する。

1. 挨拶

東京都古書籍商業協同組合理事長・小沼良成氏より開会の挨拶があった。古書組合の歴史を戦前より振り返り、インターネットとデジタル化の時代を迎えて、ネット上で古書の検索ができるサイト「日本の古本屋」の運営を始めたこと、その開設にあたっては大日本印刷や三菱総研の協力を得たこと、そして現在ではこのサイトで管理する目録が国立情報学研究所(National Institute of Informatics: NII)のWebcat Plusにも掲載されていることなどが紹介された。

2. 講演(1) 長尾真氏

国立国会図書館(National Diet Library: NDL)・長尾真館長が「デジタル書籍の時代と古書」と題して、NDLにおける図書のデジタル化の現状について講演した。

まずNDLにおけるデジタル化は現在、

・国会議事録(テキストデータ)・帝国議会議事録(画像)・貴重書画像データベース・近代デジタルライブラリー・電子展示会

等が公開されている。

今後は127億円の補正予算を利用して、1968年までに発行された図書・著名な雑誌・博士論文・官報・古典籍等約90万冊を2年間でデジタル化する予定である。デジタル化された書籍はイメージデータで著作権処理が済んだもののみ公開する。ただし館内端末では著作権未処理の資料も見られる。著作権者が不明である孤児著作物については、文化庁の裁定を受けた後に公開する。

書籍以外の新しいメディア文化財として、写真・絵画、三次元物体・遺跡、無形文化財(演説や語り)、歌謡・音楽、インターネット上の情報等、本以外の情報メディアのデジタル保存についても広い範囲を考えなければならない。

デジタル情報の保存における課題には、ひとつにはメタデータの問題があり、データの国際的標準フォーマットの設定が必要だ。また、情報の保存媒

体について、オフライン媒体での保存は媒体変質・再生機器がなくなる等の問題がある一方、オンライン媒体では、数年ごとに機器の変更とデータの移行を行わねばならず、いずれにしても膨大な費用がかかる。何百年も変化しないオフライン記憶媒体の開発が必須である。

古書との関係では、デジタルのコピーでなく実物を見たい／入手したいという欲求もあるので、例えば、古書店の在庫リストをデータベース化し、出版物情報と古書情報を一度に検索できるようなシステムや、情報と実物をシームレスにリンクすることなどが考えられる。

質疑応答では「NDLの書籍のデジタル化とテキストデータの公開について、出版界が慎重であることは大事だが、国会図書館内のみでの閲覧は地方在住者には利用しづらい」という意見に対し、「デジタル化してしまうと、世界中どこへも持っていける。利用しない手はない。人類の知的資産は誰にでも使えるべきであり、それを整備する必要がある。ただ、何も配慮しないと出版社・著者が生きていけないので、オンラインでの利用者には国会図書館に来る交通費代くらいを支払ってもらって出版界に戻すシステムにするなど、ビジネスモデルを作り、著者・出版社と利用者がWin-Winになるようにしたい」とのことだった。

3. 講演(2) 森野鉄治氏

ここ数年で出版流通に関係する企業を傘下に収め、特に昨年のブックオフ買収が話題になった、大日本印刷株式会社(DNP)の森野鉄治常務取締役が「出版印刷業界の再編」について講演した。

まずは大日本印刷の業態を説明した。出版印刷は事業の1割で、広告等の商業印刷やICカード等のビジネス関連印刷、印刷から派生した電子ペーパーなどの電子部品も大きな割合を占める。印刷業はブランドを持っておらず、これまで出版業界の中でも裏方に徹していたが、この変革の時期にビジネスモデ

ルとして印刷技術を適用するだけでは対応できなくなってきた。そんな時代のDNPのミッションを、「出版エンジニアリング」に置き、知の再生産に寄与することを目指している。出版エンジニアリングのコンセプトは、ハイブリッド出版のプラットフォームを作ることである。

2006年より、デジタル・ダウンロードの企業や出版、図書館流通等サプライチェーンを傘下に収めてきた。2009年のブックオフの買収も、その流れの中にある。

重視しているテーマは次の3点である。

(1) 返本率の改善

40%の返本率のロスを、エンジニアリングによって解決できないか。

(2) デジタルを含むメディア制作コストの削減

Forbesのデジタル部門は、デジタル化して7年であまり黒字化しなかったと聞いた。ネットの情報はタダ、という利用者の意識から、なかなか課金ができない。

デジタル化のコストを安くすることで黒字転換に貢献できないか。現在印刷工程はほとんどデジタルで進行しており、印刷データからデジタル出版することはほとんどコストがかからない。紙の印刷物とデジタル出版のハイブリッド出版にすれば「デジタル化」の費用は最低限にできる。ただ、すでに出版された物のデジタル化は課題だ。

(3) 販売機会の拡大

M(美術館) L(図書館) A(文書館)と言われるが、アナログの時代には線引きがあったが、文化財を扱うという意味ではデジタルの時代にはシームレスになってきた。売る場・出会う場もシームレスになり、本の販売機会も拡大する。

また、新刊書店は委託販売制度・再販制度のなかで、マーケティングを書籍取次業者に任せて配本された書籍を販売してきた。一方古書店は、直接顧客を見て仕入れ、値付けの判断もするという目利きであり、本来のマーケティングは実は古書店が一番進んでいる。本当のビジネスモデルは古書店にあるのではと

期待している。

4. 講演(3) 高野明彦氏

NIIの高野明彦教授は、自身がこれまで開発してきた検索システムを順に紹介しながら、検索サービスに求められるものについて講演した。

(1) Webcat Plus <<http://webcatplus.nii.ac.jp/>>

大学図書館の蔵書、1,300万冊のメタデータ・データベース。

(2) JINBOU <<http://jimbou.info/>>

神保町の古書店をひとつの図書館のように検索し、各古書店のオンライン書店へリンクする、バーチャルな神保町。神保町の古書店・中野書店から相談を受けて構築し、「日本の古本屋」に提供しているデータを預かって使う。古書店の店舗システムも合わせて提供した。

(3) 文化遺産オンライン <<http://bunka.nii.ac.jp/>>

文化庁の運営だが作成はNII。1万数千枚の文化財の写真のデータベース。全国の美術館・博物館から提供されたデータを用い、検索システムには「想—IMAGINE」を使っている。

(4) 渋沢栄一記念財団 実業史錦絵絵引

<<http://ebiki.jp/>>

字引ならぬ、絵から検索する「絵引」。風俗錦絵の中にそれぞれの事物の説明を埋め込み、また関連情報を一覧できる。

5. パネルディスカッション

パネルディスカッションは、森野鉄治氏、高野明彦氏、中野書店・中野智之氏、司会は河野書店・河野高孝氏にて行われた。さまざまな発言が縦横に交わされたので、特にこれからの書籍流通を予測させるような質疑について、かいつまんで紹介する。

Q：どうして印刷会社がプラットフォームを作ることにしたのか。

(森野氏) メディアを作る人も売る人も一人の人間ができるようになり、専門の境目がなくなるのがデジ

タルの時代である。

書店・図書館・教室等、情報が消費される現場で同時に情報が作り出されている。

オープンなシステムで、プライベートな「本棚」を準備している。例えば携帯電話のアドレス帳や、読んだ本・聴いた音楽など、リストこそが「自分らしさ」の表現である。リストを管理し、それを眺めることで自分のよく聞く音楽・読んだことを忘れていた本など自分自身を発見できる、リアルであると同時にバーチャルである「本棚」を作る。

(高野氏) GoogleやAmazonなど米国発のビジネスモデルに席卷されているばかりでなく、おもしろいビジネスが日本の中からも出てくることを期待していたが、なかなか動きが悪く、ビジネスにつながらなかった。森野氏が動き始めたことで、日本でもそういう動きが出てきたことはうれしい。

NIIは、インフラ・公共材として、情報資源を社会に届けたい。おもしろいビジネスをやろうとしている人に対して有用なツールを提供したい。

MLA連携という話が出たが、MもLもAもあまり連携について考えていない。何をしたらいいかわからない、ということかも知れない。だから、MにもLにもAにもあまり思い入れのない自分たちが外から助言できたらいい。森野構想がそこまで広がっていくといい、と期待している。

Q：デジタル化の行き着く先は、知の生産の仕組みも

変わっていくのではないかと。今見ているよりも違った局面はあるのか。

(高野氏) 学術ジャーナルは10年前から電子化が進んでいた。すでに、電子版のない雑誌は生き残っていない。当初は紙の雑誌とデジタルが抱き合わせ販売されていたが、今は論文単位で支払う購読モデルになってきている。出版の単位が小さくなってきており、ユーザは、読みたい論文だけを買いたいと思っている。

本も、知識を発信する単位が変わってくる。一部分でもちゃんと役に立つものしか生き残れない。

Googleのページランクのような、ある意味「人気投票」で人気のあるサイトが上に表示されるような検索では、個人が本当に必要な情報を見つけることはできない。

見つけやすい形に知識が再編集されれば、過去の知識にも日が当たるようになるのではないかと。

Q: デジタル時代のアナログの本の優位性は?

(高野氏) 自分は、じっくり読むのは紙の本だが、参照先はデジタルがいい。紙の本がデジタルによって生きるとなるとコンパニオンなシステムができるとよい。むしろ、デジタル書籍が単に紙の本を電子に置き換えただけでは先がないだろう。デジタル書籍ならではの利点が出てきたときにデジタルがブレイクするし、そのときにアナログの新しい使い方も見えてくるだろう。

(森野氏) 日経新聞が、アナログ+デジタルのビジネ

スを始めたが、アナログの一覧性のよさとデジタルの検索性のよさをバンドルした方法がいい。

現在のビジネスモデルと委託再販制の中で、出版業界全体の同意は難しくても、成功モデルがあれば新しいビジネスモデルに乗ってもらえるのではないかと。

最初からデジタルファースト・デジタルエンドの世代は新しい感覚を持つかもしれないが、今後20～30年はアナログとデジタルが並存するのではないかと。新しいビジネスモデルが、2兆円産業と言われる出版業界を3兆円にも4兆円にもする価値を生み出せるのではないかと。

6. 感想

シンポジウムのタイトルに「滅亡か、復権か」とあるように、紙の本と電子書籍はこれまで「紙か、デジタルか」の二者択一で語られることが多かった。だが、このシンポジウムの中では紙の良さ、デジタルの便利さの双方を認め、双方をつなぐインターネットや検索の技術や、紙とデジタルの書籍を両方出版するハイブリッド出版というビジネスモデルの提案がなされたことが新鮮であった。

今年は、日本でもKindleやiPadなどの電子書籍端末の発売が予定されており「電子書籍元年」とも言われている。書籍流通が今後どのように変化していくのかを注視したい。

(『情報管理』編集事務局)

参考文献

- 1) VideoPlanning. "VideoPlanning on USTREAM". USTREAM. <http://www.ustream.tv/channel/videoplanning>, (accessed 2010-04-27).
- 2) arg. "Togetter - まとめ「日本の古本屋シンポジウム「滅亡か、復権か」". Togetter. <http://togetter.com/li/15237>, (accessed 2010-04-27).